

近世地方文書用字考

浅井潤子

目次

はじめに

異体字とは

異字

(一) 同字

(二) 省字

(三) 移動字

国字・造字

仮借字（当字・宛字）

おわりに

はじめに

古文書学とは、従来古代・中世中心の学問として発達し、その主要な研究テーマは古文書の様式論にあった。しかし第二次世界大戦をさかいとして急速に近世古文書の調査・研究が注目されるようになったため、古文書学そのものの研究テーマも次第に様式論のほかに、古文書の内容や分類、そして料紙や筆蹟・書体・印鑑などに至る外的形態の分野にまで研究の進展がみられ、同時に古文書の使用字が、今日の常用漢字と全く異なる草字体が多く慣用されているため、その用字・用語の研究も近來とみに盛んになってきた。

曾て太田晶二郎氏は「古文書のよみ方」と題して稿を創され（『郷土研究講座』7 研究方法上 角川書店）、その序文に「異体字知らずんばあるべからず」と書かれ、「異体字一隅」のみを列挙された。その理由に「浅陋ナル講説ヨリハ、異体字一隅ノカタ、寧ロ多少トモ実益アランカト思ヒナリテ、専ラソレニ紙幅ヲ充ツルコトトセリ」と説明している。たしかに近世の地方古文書の解説方法において異体字の習得がなくては、とても正読することは困難で、近世古文書学研究においても大きな地位を占めていることは筆者も言を俟たない。しかし「古文書のよみ方」という項で、「異体字一隅」のみを挙げられただけで初心者が古文書を読みこなせるという説はやや大胆すぎるようにも考えられるが、他面古文書の読解にはまず異体字の履修が大きな比重を占めていることを表現されたためであろう。

また荻野三七彦氏は「古文書の異体文字」（『異体字研究資料集成』月報2号 雄山閣）の論考の中で「近頃は古文書の写真集の刊行が流行して、それらがよく売れるそうである。そうした古文書写真集には活字による解説が付録になっていて独学の便宜が考察してある。しかしそのような付録解説のその大半はすこぶる勉強者には不親切である。一番問題なのは異体字についての説明であろう。……学生は活字のものしか読めない。その上に当用漢字のみを学んで来る。そこで私の努力は加重に耐え切れない。ここに一例として古文書の一節を示すと「仍って執達くだんのごとし」とある。それは「仍執達如件」と古文書には書いてある。「執」を「執」と書くのであるが、古文書写真集解説の偉い先生は途中を省略して、いきなり執と説くから初心者は「執」の草書がどうしてそうなるのか、さっぱりわからなくなるのである。「相違」という言葉も古文書には多く出て来るが「違」は「逵」と書く、まさに異体字であるが先述のように矢張り教える先生方

は「遠」を省略して教えるのである。誠に困ったことである。」と述べられている。古文書を手がけ多少なりとも読解法と異体字に関心をもつ一人としてこの指摘は大いに同感である。

荻野氏も述べられているごとく、近時とくに一般社会人の古文書読解力習得の要望は日ごとに高まり、数種の「古文書演習書」が相ついで刊行され、その巻末には「異体字一覽」が付記されている例が多い。しかしその大方は異体字を字画別または無作為に排列しており、また異体字そのものも、すでに近世では余り使用されていない古代・中世の異字までも包摂されている。これらは近世の古文書学の研究が遅れているあらわれでもあるが、筆墨文化が急速に発達し、字を書くという行為が一般庶民にまで広く浸透した江戸時代では、従来使用することのなかった異字や仮借字（当字・宛字）が頻発するようになり、近世地方文書における使用字の考究が必要であると考ええる。

そこで小稿では、先学の諸説を参照しながら、江戸時代の古文書に多用されている異字、就中近世地方文書には欠くことのできない仮借字・誤字といわれている慣用字の成立経過などを考究し、二、三の用例を交えて江戸時代独特の異字の類型を考えようとするものである。近世地方文書を取り扱うものとしてその解読法の難解さを如何にしたら習得しやすくなるかとの考えからの試みでもある。

異体字とは

「異体字」という語彙は、漢字の本拠である中国でも、書体の違いを指すのみで、一般的に用いなかった用語のようであるし、ましてや日本においても江戸時代が初見であることは、杉本つとむ氏が『異体字研究

資料集成』（雄山閣刊）の解題中で詳細に説明されている。

異体字とは要するに同一字にして、その本字と形態を異にするものを一般に「異体字」と呼称し、その時代の常用字・正字であつて、今日からみればそれが異つている字体であり、また誤用字とも思われる字で、慣用したその時代の人は、異字という少しの奇異感をもたなかった字であつた筈である。江戸時代の儒者新井白石は、著書『同文通考』の中で「魏ノ江式ガコトバニ世易（カハリ）風移リ、文字改リ變リ、篆ノ形錯リ繆リ隸ノ體眞ヲ失フ。」と引用し、時代の推移によつて字は変化することを述べているが、就中江戸時代の使用字が現在の常用漢字とは異なる字、これが今日においていう異字であるということになる。

『日本古文書字』の著者伊木壽一氏も同書の異体字の項で「古文書には普通の漢字や国字を減画・省略あるいは増画・合字ないしは転換・誤用などして造つた文字がたくさんある。それは異体文字すなわち異字といわれるもので」と異体字を説明している。さきの新井白石の『同文通考』も全篇を国字・国訓・借用・誤用・訛字・省字に分けて、それぞれ用例を挙げている。

そこで以下江戸時代の地方文書に使用されている所謂宛字・誤字を含めた異字を、使用例をもとにその用字の意味・成立経過などを勘案して類型的に考えてみることにする。

異 字

（一）同 字

同字には、①漢字本来の同字と、②漢字本来の意味とは全く異なつて、日本独特の意味の字として宛

てて同字になったものがある。後者の②を一説には「変意文字」（山口徳平氏「日本における異体と異説の漢字」）と呼称している。

①の類型には一般には異字とされている漢字本来の同字には「最」の同一語異体字として用例に出る「取」がある。「取」は音は「サイSE」聚と同字で最の俗字とされている。正字である「最」も同音で聚と同字とともに、「撮」の初体字で「とる・つまむ」の義。張自烈編の『正字通』には「取今借リテ作最誤」と字形を誤って最と通用する字と解釈している。しかし近世の地方文書では正字の最は書かず、「取」または「**取**」のように「取」が常用字であった。

また「本陣」は今日の常用字の「陣」と「陳」が江戸時代には同字として両様書かれている。「陳」は「陳」が元字で、省字として「陳」になり車に変形した字である。陳を字典で確かめてみると「もと陳につくる。陳は形声で支十陳声、陳はまた阜十木十申声。申はのびる意、まっすぐのびた隊列の意、のち支が省略され、木十申の部分に車に変形した」とある。陣は音で「ジン・チン」で義は「つら・ならび」であり、ともに同字で陳の方が古い字であって別に異字ではない。

古字で同一字であるのに異字といわれる字に「**支**」がある。元禄五年刊の『異體字辨』（中根玄珪編）には「事」の古字としてのみ記しているが、『説文』では事の古字として「**叟**」を示している。江戸時代の通用字は一般に「ふるまたの事」といわれるように「**支**」と「**叟**」で統一して使用されているが、元来この「**支**」も「**叟**」であったのが、何時の頃からか「ふるまた」に変字したようである。すくなくとも歴史資料では中世からこの字は使われていたと思われる。このように古字を含めて異體同字と

しては「**矢智**」の「規」規「**冊**」冊「**は**」は「**法**」法「**場**」場「**宜**」宜「**宜**」宜などこれまた数限りなくある。

その中でも現代の辞書に出てこない字として註記したいものにつぎの「**土**」がある『正字通』には俗字と書かれているが、すくなくとも昭和初期まで書かれていた「**土**」は「**土**」**土**（古今異字叢）よりであった。江戸時代の古文書のくずし字を読むには、この「**土**」にはどうしても「**、**」がなくてはならない。草字体は「**ち**」であって「**、**」が生きている。『異字俗字由来記』には「不用ノ点ヲウチタルモノ」としてこの「**土**・民・駄」などを挙げているが、古文書では不用ではない点である。


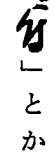
なお今一つ常用字として地方文書に多用される同音同字に「**情**」情「**情**」情「**情**」情と「**情**」情が同一字として通行している。百姓の「姓と性」食糧の「糧と粮」ともに同音・同義の同字でともに混用している字であり誤字ではない。

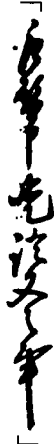
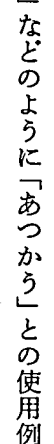

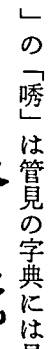

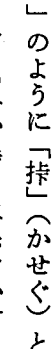
②の場合には、たとえば江戸時代の地方文書には、国名を「**相列**」相列「**相列**」相列と「**相列**」相列「**相列**」相列のように、同一文言の中で「**州**」と「**刴**」が同字に使用されている。『同文通考』には、「**刴**は俗ノ州字」と書かれているが、「**刴**」は漢字では、音は「レイ」意味は割くとあって「**州**」とは音・語義とも全く異なっている字を同字として慣用している。

また異字の代表として、よく例に挙げられる字に「**下**」下「**地**」地「**者**」者「**近**」近の「**近**」は音は「ショウ・チョウ」で字彙は「行く」との義である。現在の常用漢字の「**迄**」は音は「キツ・コチ」で「いたる・およぶ。ついに」などの義で、国訓として「**まで**」の訓みを当てる字である。この「**迄**」に「**近**」を当てる




は誤字であり、勝手に通用させた字であると『同文通考』は記している。

慣用字である「俵」は、米をはじめとする穀類や芋・塩・木炭・石炭などを入れる容器である「たわら」またはそれを数える単位の「ヒョウ」として今日でも通用しているが、この漢字は、本来は「散る」「分与する」との語義であつて、音は同音の「ヒョウ」であるが、意味は前に述べたごとく全く異なる義である。

同字とされていて、同読の字に「**屯**」(暖)という字がある。音は「アイ」訓は「いき」さらに国訓として「なぐさめ」とある。しかし近世の地方文書では、「**屯**」「**屯**」とか、

「**屯**」「**屯**」などのように「あつかう」との使用例が多い。前掲の『異體字辨』の「和俗字」にも「暖」(あつかう)とある。「あつかい」すなわち「扱」と同字に宛てている。またつぎの「**屯**」「**屯**」の「**屯**」は管見の字典には見当らず「捌」の同字として「さばく」と訓み、捌と同語義に用いている。稼という字も「**屯**」「**屯**」のように「**持**」(かせぐ)という

字を使用してゐる例は割合に多い。元来「**持**」(かせ)という国字からきたもので、**持**とは糸をかけて束ねる道具のことである。このように本来の漢字にはない字や訓み方によつて使用されている例は意外と多いものである。

同訓・同義で勿論同字であるが、今日では異字とされている字に「**屯**」「**屯**」「**屯**」という用語中に「**屯**」という字があつた。草字体では「**屯**」と書かれ、普通では「**屯**」と読んでしまふ。それでは意味が全く理解できない。もしこの字があつたら何んと読むか。「二類共難有奉存候」となるのではないか。この場合「がたし」という字の同字を探索する。「**屯**」の字、音は「ハ」であるが、訓は「か

たし」で「難」と同訓・同字である。ここで「叵有奉存候」と正読できた。「難」の異字に「叵」が同字であることが判明する。この「叵」は中世では見かけける字だが、近世の地方文書には余り多用されていないので容易に正読できない例である。

以上数例を掲げたように全くの異字と、同義・同訓の同字であるのに現代からみれば異字と考えられる字などさまざまであるが、要するに江戸時代の慣用字が、今日使用されていないとき、現代人から見ればその字はすべて異字と解されるのである。

なお同字の中でも、字の一部が同字であるために同字の異字とされている場合がある。

辞書にも記されているように、「火」の字が字画の脚になる時の形は「灬」であると。たとえば「肝煎」の「煎」は現在では「煎」と書く。「**火人上者**」(灸上は)は「然る上は」であり「**湯**」(熱談)の「煎」をはじめ「**熨**」(熱)「**煮**」(煮)などであるが、とくに「**煎**」・「**煮**」・「**熨**」は近世文書では、今日では異字といわれる字の使用がほとんどあるといっても過言でない。

また「心」は同字として「忄」又は「小」がある。「忄」は心が字画の偏にくる時に限って「りっしんべん」になるが、「心」の同字としての「小」はたとえば「忄」の字が「忄」になる。この字例について『同文通考』は「白蛾曰、忄、與忄同」と記しているが、江戸時代の古文書とくに支配文書の書翰に「**りっしんべん**」のごとく書かれているが、「小」が「心」と同字であることが意外と気がつかない人が多い。なかには「忘」と誤読している例もしばしば見かけける。やはり「忘」では解読できない。このように字全体でなく、下部のみの同字も案外見逃すことのできないものである。「水」が「氵」「氷」と同字になるなどは

「海」が移動字（後述）になって「槃」と書かれたりするのも同じ意である。

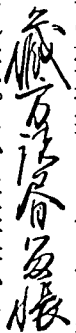
(二) 省 字

① 草書体から生まれた略体異字

この代表的なものとして、七十七歳の祝を「喜寿の祝」という語源になった「喜」の字がある。これは「喜」の字の草体で「𠂔」が七十七と読まれるからであり、「喜」の異字となったのは周知のことである。

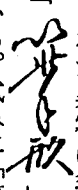
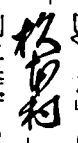















また現在では常用漢字となっている「𠂔」や「𠂔」は「𠂔」の草字体から略体異字となったことを山崎美成は『世事百談』省文の項で

盡と尽に作るは盡の草體をとかけるより草體を眞書となして尽とかけるなり、これによりて書を𠂔、𠂔を𠂔に作るは非なり

と記している。しかし指摘された誤用であるとされている字は地方文書にも見られる。当館所蔵史料目録第三十八集の新潟県頸城郡の大庄屋佐藤家文書目録中にも「」（藏方諸書留帳）という表題の冊子があった。書を𠂔と誤用している例かもしれない。しかし草字体からきた異字であるとするれば、𠂔・𠂔などはかならずしも誤用であるとは考えられないと思われる。

このほかに年号に使用される「卯」の「卯」は、草字体の卯の眞書より表現した「卯」という異字となったものである。同様に「柳」「聊」も旁は「卯」の草字体となっているが、元字は大方異字

として扱っていない。

なお草字体から生まれた異字は非常に多く「遠々」の遠々違、「執執」の執執執や、「迎迎」の迎迎逃、「欣」の欣形、「杉」の杉杉杉をはじめとして、圖が図に、實が実となったとされている。試みに「違」という字を例に挙げると、江戸時代の古文書では「遠」という異字の草字体で書かれることは前述したが、大方の「草字大字典」では、正字の「違」の草体しか表記されていない。

卷之八

草字体變じて楷書となった省字は前述したが、最後に踊り字からきた略体字について触れることにする。

踊り字とは正確には、漢字が重字又は疊字といわれるもので、新井白石はこの字型を略体字と称してお

「石室」「於省帝位」「專政」「終所除」のよ

出_二岁
炎_二冬
棗_二冬
纔_二纔
品_二只
澁_二澁
蟲_二夷
劦_二又
森_二交

脇ニ脇
 鼻ニ鼻
 晶ニ晶
 蕁ニ蕁
 綴ニ綴
 樂ニ樂
 麤ニ麤

近世地方文書用字考（浅井）

復元できる。ただし「**タ**」の「**鹿**」は「**粗**」と同音・同義で使用語も同一語であるが、おどりの「**タ**」が上部になっている特殊なケースでもある字と考えられる。

④ その他

同音で省字にした例として「**釋**」がある。前掲の『世事百談』卷三に

釋を釈に作るは、釋と尺同音なれば、筆畫の少く書写に使ならんとての假借なり、文字は似たりといへど、澤を沢に作るは非なり、そは澤に尺の音なければなり

と説明している。この山崎美成の説を借りれば、澤の沢は誤用と指摘しているが、それならば常用漢字である驛の駅、擇↓択、譯↓訳なども誤用漢字と解釈するのであろう。

以上数例ではあるが、異なる経路によって省字となった字を示したが、ちなみに黒柳 勲著の『俗字畧字』に揭示されている略字の諸類型の字を近世古文書に多出する一部の字のみを参考までに抄出してみる。

① 文字ノ一部分ヲトリタルモノ

號〓号 錢〓戔 邊〓辺 雖〓虽 條〓条 縣〓県 聲〓声 與〓与 部〓刀

② 音モ義モ同ジクシテ畧字視セラル、モノ

華〓花 源〓原 嶋〓島 紙〓帀 註〓注 後〓后 控〓扣 傍〓旁 週〓周

劍〓劍 廓〓郭 同〓全

③ 畧字ニアラザル他ノ文字

缺〓欠 證〓証 餘〓余 町〓丁 段〓反 舊〓旧 頭〓次 桑〓菜 儀〓義

擔〓担 鐵〓鉄 豫〓予 幅〓巾 趣〓赴 飾〓鋸 諍〓争

㊦ 一部分ヲ畧シタモノ

讀〓読 圍〓囲 應〓応 點〓点 壓〓圧 獨〓独 鑛〓鉱 惠〓恵

㊧ 組織ヲ変ジタルモノ

學〓学 歡〓歡 彌〓弥 稱〓称 辭〓辞 譽〓誉 爾〓尔 書〓書 廢〓廃

魚〓魚 濕〓湿 違〓违 留〓留 兩〓兩 等〓等 鹿〓鹿 森〓森 品〓只

炎〓炎 所〓所

㊨ 二字ツマキノ畧字

菩薩〓ササ 距離〓巨离 枝幹〓支干 娑婆〓メメ 叮嚀〓丁寧

㊩ 古字ニシテ畧字視セラル、字

禮〓礼 佛〓仏 虎〓虎 草〓艸 嶽〓岳 從〓从 寶〓宝 歌〓哥 去〓公

雁〓雁 棄〓弃 贊〓贊






以上の略字の中には一般には異体字とされている「**𠂔**」の「𠂔」や「**𠂔**」の「𠂔」も含まれ、またおどり字や移動字(後述)、さらに佛家で古来より用うるところの熟字の偏旁を省ける二合の省字なども包轄され、やや著者の略字の規定の範囲が広すぎるようにも思える類型である。

近世文書中でよく使用される省字の異字とされている「**𠂔**」の「𠂔」(異)は元字として「𠂔」

であったのが「𠂔」となったとされている。同様の字として「𠂔」(靈)がある。これも俗ノ靈の字は「𠂔」であり、それが「𠂔」字と同じ変型をたどって「𠂔」となったとされている省字である。

(三) 移動字

一説には「偏旁冠脚之転換」(『俗字異字』)とか「扁などの転倒および合成」などと述べているものもある。所謂転換・転倒文字、またはさかさ文字である。『道齋隨筆』では「動用字」としている。ここで移動字という用語を使用するのはかならずしも適切ではないかもしれないが、便宜上使用する事にしたい。この文字について白石は『同文通考』の中で「晉・唐ノ代、書學盛ニ行レシヨリ、文字ノ上下、左右相易、或ハ増、或ハ省ケルモ亦多ク成タリ、(中略)蘇ノ字ヲ蘊ニ、秋ノ字ヲ𠂔ニ作り、鵝ノ字鵞ニ作ルノ類、其字モト体ヲ結ガタキユヘニ互ニ換スルコト如此」と。この新井白石のいう、上下・左右相易ル字ハ江戸時代の地方文書にも数多く使用されており、読解に当ってはかならず頭に入れておかなければならない字型の一つである。どうしても読めなければ、前後・左右移動して判読せよとまで極言したい字型である。

とくに白石のいう「蘇」の字は、日本では江戸時代はすべて移動字のみで書かれた感がある。すなわち「」(耶蘇宗門)の「蘇」は大方がこの移動字で統一されていたと思われる。このほか「」の「養」(養ノ)「」の「秋」(秋ノ)「」の「」(岐ノ)をばはじめとして、左右よりはむしろ前後替る字例の方が多い。

松 二 恠 梅 二 毒 暫 二 轄 暑 二 睹 峨 二 峩 勢 二 務 案 二 桉 桃 二 莢 群 二 羣

娶_二娘 煙_二壺 概_二槃 海_二衆 期_二莽 和_二味 娘_二朗

このほか名前に多出する崎_二寄や島_二嶋_二鳥_二、また「**寛文十年**」や「**文政三年**」の「**文**」のごとく年号にはよく書かれる政_二要などがある。

しかし草字体としてこれらの移動字が書かれた場合は、大抵は判読困難になる事が多い。例のように書く。同様の例として「**入山修**」の「**覽**」は「**覽**」が、また「**決**」は「**決**」の如く移動字「**決**」の草字体が慣用字となっている。正字の草字体のみで判読しようとすると至って難解である字の代表である。

地方文書の解説でよく問題にされる字として「斗」がある。「斗」は「ばかり」と読む。史料集などの翻刻のときには「計」とする。しかし何故「斗」が「ばかり」計」と同字なのであろうか。あたかも「ホ」が「才」(等の異字)から変化して宛てた字と同一視されがちである。しかし「斗」が「計」との同字である理由はやや字型の変化によると考えられる。これはあくまでも私見であるが、「計」の正字が移動して「斗」となり、この草字体が「**斗**」になった。この字型から容量の単位である「斗」を宛てるようになったと思われる。「斗」は音では「ト」であり、訓では「ます。たちまち(忽と同意語)。つまりく(斛)」しか訓むことができない。どう調べてみても「ばかり」と読む用例は今のところ判明しない。したがって、以上のような字型の変化をたどって「計」を「斗」と書くようになったとしか考えられない。移動字の草字体から変化した一種の異字に入ると考える。このように草字体から生じた異字は他にも多くある事は「省字」の項で取

りあげたが、それは正字又は異字の草字体から生じたものである。

国字・造字

日本での造字の代表は国字である。国字には中国に産しない草木・魚類の名称が多く造字されているので判明するように、漢字で国語を表わすのに適当な漢字が見当たらないとき生まれた字である。これには漢字になって新たに作ったものと、漢字を利用して別の意義に用いたものと二種類がある。すなわち日本語のための日本製漢字である。しかしこの『同文通考』には、「国字トイフハ、本朝ニシテ造レル異朝ノ字画ニ見ヘヌライフ、故ニ其訓ノミアリテ其音ナシ」と説明しているごとく国字および造字には「音」よみはない。国字は数限りなくあるといつてよいほど多い。そこで二、三の事例を伴直方著の『国字考』（文化十五年四月）によって提示するにとどめる。

辻 辻は閑田耕筆によると「或人乃話に辻といふ字、此方にて作れる誰もしれり、然るに世に辻と書ハ義なし十字街の事にて十^ッといふかなを一字になしたる也」と記している。地方書では十字街のほか、「高辻」「米辻」などと慣用しているが、これは物の合計を意味し、「高辻」は高の合計のことをいう。

畠 白田の二字を合わせて一字に作れるなりと。新井白石は玉海に「畠・水田とあり、是等文字の出所とすべき歟、漢字では圃の字をはたとす」とある。

畑 火田の二字を合わせて一字とせしなりとある。しからば畠と畑はどう違うか。畠は陸田で畑は焼畑農業が行われるようになってからできた字ともいわれるがさだかでない。地方では混用している例が多い。

峠 契沖云「山のたうけといふハ国のさかひの峯あるハあら山のいたゞきなと通る人のそこにならず手向する事なれば、そこをやがてたむけといふを音便にてたうけと云なるべし」と。山と上・下を合わせて山のしりと下りとの境めなる所の意を表わす会意字である。

舂 身を分つ意にて作れるなるへしと記しているが、幕末の「倭字攷」（岡本保孝編）には「舂 我子ヲ今俗セカレト云、我子是我身之所分也、舂ノ字可通攷」と。この字は近世の地方文書では「舂^ハ舂^ハ舂^ハ」などのように宗門送手形や宗門改帳などに多く使用されている字である。自分の分身のせがれとの造字であつて、他人の子息の舂と区別しているといわれるが、かならずしもそうでなく、むしろ地域的な用字として慣用されているようにも思える。とくに信州などでは使用例が多い。

𪛗 「いり」「かます」と訓む漢字の「𪛗」であると記され、さらに「文教温故」を引用し「土辺ニ入ノ字𪛗、コレヲイリトヘリ、イリヒ也、地ニ樋ヲイレテ水ヲ通スル也トイヘリ、川普請或ハ用水ナドノ木ニ云詞也、水ヲセキオキテ時トシテハコレヲトリ捨レハ水流ル、也、𪛗樋ト云ハ今俗ニ云詞ナリ」と説明している。「かます」とは藁・藁^{ハシロ}の袋の数詞に用いるが、一般には「𪛗」と書くが、稀に古文書ではこの「𪛗」を当てることもあるが大方は用水普請の「^ハ樋」に常用される。大石久敬著の「地方凡例録」下巻の𪛗樋の項にも「是ハ川より井路筋^{イロ}へ用水を引入れ、又ハ悪水を落し、又ハ堀より川へ引入るゝ為に用ゆる物にて、其仕立方は、落し口ハ板にて差回して堤へ伏込ミ、戸を明け立する様に作りたるものなり」と記述している。

なお国字の中には、現在「異字一覧」にかならず収録される字に「^ハ舂^ハ舂^ハ」のように使用される「舂」がある。辞典の一部には国字として舂と同字とのみしか記載されていない。舂はあらぎぬまたは絹織

物の総称で、『説文』には「按生帛曰絹」とあるが、国字である「絹」とはどう異なるか。近世の古文書では、すべてこの国字で書かれているが、何故この国字の「絹」を作ったのか。また何時現在の常用漢字「絹」に統一されたのか。疑問が残る字の一つであるが、同時に国字が何時頃からどのように造られたかも明らかにされていない。

国字のほかに地方文書には地方的な造字がある。これは或る意味では宛字の一種に属するといわれるかも知れない。しかし宛字とは従来存在する字に他の字を当てはめる事であると考えるが、つぎの例は字書にもない字を造って慣用しているので造字と考えたい。

管見では一例にすぎないが「斛」という字である。これは東北地方とくに秋田県秋田郡地区の文書によく見かける字である。最初はこの地方の方言に当て字をしたものと思った。しかしこの地方の方言集にも出てこない。ましてや字典を繙いてもこんな字はない。しからばこの地方の人なら読めるのかと質問したが、現代人では返答がない。ついに整理中の龜絵図に平仮名で「もくろみ」と書かれたのを発見し、やっと「目論見」という用語の造字であることが判明した。なるほど目で見て計るのであるからこのような造字になったものであろう。最近当館所蔵史料目録（三十四集「出羽国秋田郡南比内一関家文書」）中にも「普請斛帳」とか「釣鐘斛書」などと表題に書かれているのが散見できる。また明治時代に入っても「銀行開計」や「斛」のごとく「もくろみ」という字に使用している例が見つかる。

ところがこの「斛」が日本の西の中国地方でも造られており、訓は「さやし」で語義は目明しとか横目である事が偶然にも判明した。しかし同じ中国地方のなかでも岡山地区では、訓みは同じ「さやし」でも語義

が異なっている事例がでてきた。前田正治氏が『具体例による歴史研究法』（吉川弘文館）のなかでつぎのように述べている。長文ながら全文を掲げる。

加茂庄管十三流で名ある旧岡山藩加茂郡諸村（現岡山県御津郡加茂川町）の調査の際、しばしばこの字が出てきて一同閉口したが、土地の故老によって「さやし」と読むことが判った。「さやし」と云う語自体は岡山方面でもよく使われている由であるが、このような字が当てられていることは始めて気付いたことである。

蚪は厳格な意味ではないが、ほぼ競売のようなことに当り、身代に詰って家財を処分するような場合、普通ならば値の付かないようなものでも、蚪となれば、どんな細かいものにも値を付けて処分できるものである。

と。このように字書にもない地方的な造字「蚪」が、日本の北と南の地方で偶然に造られ、訓み方も語義も全く異なるということがあるという事は不思議といわざるを得ない。

仮借字（当字・宛字）

辞書にも用例のない字を当てて記述している所謂仮借字（以下宛字という）は、幕府の公式文書は勿論近世の支配文書では比較的使用例は少くないが、地方文書とくに百姓文書には続出する。前出の『同文通考』では、これを「借用」語と命名し、「音または訓の相近から通行するもの」としているが、地方文書中の宛字はむしろ字がわからなくて適当な同音・同訓を宛てて書いた誤用・誤字と考える方が妥当であろう。中で

も同音の宛字は圧倒的に多く、地方文書には欠くことができない。判読困難な用字または字が読めても意味が判明しない場合は、まず同音の字と考えて当てはめてみることも、判読の一方法でもある。

① 同 音

宛字の中で一番多いといわれる同音とは、その筆頭は人名であろう。たとえば享保期武蔵荒川や、宝永の富士山山焼（噴火）による被災地相州酒匂川の治水奉行として活躍し、名著『民間省要』や『治方要方』を創した田中丘隅は、別字として「**田中休愚**」のように同音の休愚と名書きされている。異字同人である。このように同音で人名が書かれることは、地方文書就中百姓文書では乱用されている例が多い。同人である筈の人が **付** **女** **伊** と違った字で書かれているのはじめとして政治・政次・政二、太兵衛・多兵衛・太平、また市右衛門を一右衛門と書くなど混用する場合が多く、土地集積のデータや人口統計を作製するときなど、余程注意をしなければ異字同人と同字異人の判断がつかかねる事がしばしばである。人名のほか同音の宛字の用例として数例を掲出してみる。

たとえば「貢」という字は、音は「コウ」または「ク」であり、一般に地方文書では「年貢」という用語の「グ」の発音が慣用である。しかし宛字として使用するときは「コウ」「ゴウ」と通用することが多い。「兎貢無御座候」「**ち美市**」とか「**年貢改元**」などはその一例である。なかでもこの「年貢（号）改元」は町方の「公用留」に記された使用例である。

格別之御深節（親切）

御堅慮（御賢慮）奉願上候
白方（八方）尽力仕候得共

御才判（裁判）可被成候

普請明細書上ケ長（帳）

このほか「染々（全然）取合呉候鉢も不相見」「千（先）年月ニ六斉市相立候」など、つぎの同訓とともに

実底（実鉢）成ルものニ御座候間

数限りなく用例はつきない。

② 同 訓

同訓も同音と同様に用例は枚挙にいとまがない。地方文書に多出する用例を示すと、「六借」「土娼」「中能」（仲好）とか「浦山敷」（羨しく）「彼是」（彼此申間敷）有増・荒増（荒まし）「虎」（寅之七月）「村贈り」（村送り一札）「兎角墓々敷儀無御座候」「墓々敷」（兎角抄々敷儀無御座候）

「御下附被成下度」などがある。

「被成降」（御下附被成下度）などがある。

③ 他国語の音訳で同音


たとえば「檀」という字は、日本では本来「まゆみ」という木の名であるが、梵語の dāna の転訛略音訳

で、中国では「檀」は「飄して為_レ施」とし、辞書にも、ほどこし・布施・施主の義と記している。そこで檀那とは梵語の陀那鉢底(Dana-Pati)の転訛語として、我が国での主人をあらわす旦那と同字になり、また擔の俗字で“はらう”“うつ”などの意味のある担や、夜明とか朝などの義である旦を全く同一字として宛てるようになり「檀那寺」「旦那寺」「旦那寺」に今一つ異字として「檀那」(檀那)を含め、四通りの用字が江戸時代全般に全国での使用字となっている。

④ 中国音での同音

庄屋の日記や御用留帳、さらに名主間の書状の日付を「**壬辰** 全下」また、明治の元勲伊藤博文がときの首相桂氏宛書簡に「**壬辰**」と認めている。この「念日」であるが、語感からは仏教用語を連想させる。「念」とは音が「ネン」訓は「おもう」で、大漢和には「廿」と同音なり。さらに「二十」は「廿」の字の代わりに用いると説明している。ここで「念」と「廿」と同字であることは判明し、「念一日」は廿一日、「念三日」は二十三日である。さて中国語の発音を知らないものにとつては、どうして「念」と「廿」が同音であるかに疑問が残る。「廿」_ニデン_ンの俗音が「念」に近いので宋代から用いられた事を知り、さらに「念」も「廿」と近世・現代ではともに nins (ニエン) と発音することから同音・同字に使用している。江戸時代の人々は、このような語源に精通した上で常用していたのであろうか。

⑤ 同義からの宛字

江戸時代の後期まで年号にしばしば見かける字に「刁」がある。たとえば、
のごとく常用された。「寅」の同字の「刁」である。これは同音・同訓でもない宛字である。「刁」は音は「チョウ」で正確には刁斗（チョウト）の事で、辞書には「銅鑼」と同音であると明記している。それは山崎美成著の『世事百談』巻三に

十二支の寅を刁チウに作ること安齊の記に、寅の字の代りに日本の俗刁チウの字を用いることは、刁は火熨斗の如くなる器なり、軍中にて湯をわかし食物をも煮る物なり、これをどらの如く打鳴ものにも用る。どらといふ心にて寅のかはりに用るなべしと云説ありといへり、刁を用ふることもふるきことと見えて「扶桑略記」拔萃に十月甲刁日とかけり


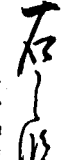
と記している。刁の義である刁斗と同義のどら「銅鑼」と同音である。いわば同義字の音感から使用した宛字である。


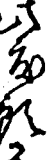

また同義から宛字にしたものに「晦」がある。「晦」は音は「カイ・クワイ」暗いという義である。『説文』には「晦」は「月盡クル之名也」としているが、たしかに日本でも「晦日」といつて各月の最終日の称呼としている。これは陰暦の月の最終日は月が一番欠けて月籠る日、即ち暗夜となって暗くなる意から、この日を「晦日」（みそか）と名付け、又の名を「月籠る」（つきこもる）日が「つごもり」となった。したがって一年の終りを「大晦日」（おおみそか・大つごもり）との名称が聞かれる。月がこもる暗い義からであったが新暦になった現在でも常用されているのは、やや奇意な感じを与える。今日では月末になっても月が朧々

と輝いて「晦日」の宛字をした意味がなくなって、いわば時代にマッチしない死語になるべき字の一つであろう。

⑥ 音感からの類似音

音感の類似音によってした宛字に「鳥渡」と「察当」の用字がある。

「鳥渡」とか「鳥渡申上候」など書簡の書出しや、「鳥与」「鳥兔」とも書いているのに結語として書かれている用例が多い。「一寸」の宛字であるが、このほか「鳥与」「鳥兔」とも書いているのもよく見かける。(幕末の例であるが音感ではなく同義として「些ト行カレヨ」と「些」の語義が「すこし」「わづか」との事より「一寸」と同字に宛てている)

また「察当」も「察当」「度」「答」を当てたり、「差度」「撮当」「撮度」と数種類の字が当てられている。正確のように「当」に対し「度」「答」を当てたり、「差度」「撮当」「撮度」と数種類の字が当てられている。正確にいうと「察」と「差」、「当」と「度」とは同音でも同訓でもない。どちらかというと音感からきた宛字と考えた方がよいかも知れない。語義も現代語では「人の行為を咎め、非難すること」と解釈されているが、江戸時代には用例でも示すごとく「御叱り」をうける意である。

おわりに

黒柳 勲氏は『俗字略字』の緒言で「俗字・略字は文字の進化であって、死んだ正しい文字よりは生きた

俗字・略字の方が遙かに貴い」とされている。しかし近世の古文書は、大方は正しい文字も、生きた俗字・略字ともに草書体で慣用されているために、進化してゆく俗字・略字は勿論、死んだ正字も貴い。前述のように正字であるべき「土」の点は現実にはどの辞書からも姿を消している。「者」も「都」も点はなくなってしまうている。しかし江戸時代の草書体の古文書には厳然として生きている。死んではいけない正字である。

国語学者の文字論は、たとえ「正・俗・通」に類型化されても、これは前提条件として楷書体に限るべきであると『異体字研究資料集成』の編者杉本つとむ氏も述べられている。この論から考えると日本史での古文書学とくに江戸時代では、草書体を根底とした独自の用字論の考究を展開しなくてはならないと考える。これらはむしろ一般文字論からはずれるかも知れない。しかも大海の一滴にしかすぎない少例で類型化を論ずるこの小稿は、国語学者からは、無謀にすぎる行為であると思われるであらう。しかし近世の地方文書を取り扱う一人として、たとえ九牛の一毛であらうとも、地方文書独特の類型化を試みることによって、これを機に僅かずつでも多くの用例を集収し研究することが急務であると愚考する。近來中国の漢字は急速に簡略化が進み、日本の若い世代もすでにそれらを導入している。これらを鑑み死字化する異字を何んとか正確に把握し、後世に記録として留めることができたならばとの思慮から一つの布石として試みた作業である。そこには多くの疑問と課題が山積みされているが、今はとにも角にもこれをベースとして特殊な地方用語とともに用字の調査・収集に専念し、個々の研究は後考に俟つことにする。